

発行日：平成24年1月18日（毎月1回WEB発行）

新しい年が明けました。福島県は昨年同様今年も復旧復興に向けて前進して参ります。福島の今の暮らしをご覧ください。なお、本紙の英語版・中国語版・韓国語版・ポルトガル語版・タガログ語版・フランス語版は、当協会HPからダウンロードできます。

【(財)自治体国際化協会助成事業】



福島の風物



猪苗代湖
(郡山市 2011.12.29 撮影)

磐梯山が雪化粧し、周辺のスキー場も賑わい、北国からの訪問客、白鳥も猪苗代湖を訪れました。いつもと変わらないこの風景に、なぜかホッとします。



初詣 (福島市 2012.1.1撮影)

初詣をしようと多くの市民が稲荷神社に集まりました。沿道には縁起物のダルマや、甘酒やたい焼きなどの出店も立ち並び、新春の賑わいに華を添えていました。



成人式 (福島市 2012.1.8 撮影)

福島市国体記念体育館で、新成人約2,300人が出席しての『成人式』が開かれました。会場の外では振袖姿やスーツ姿の若者が、久しぶりの再会を喜び合う姿が見られました。



福島からの声

長谷川伊左子さん (郡山市 女性)

震災当時は、パラグアイに住んでいました。テレビで震災のことを知って、「ものすごいことが起こった、正直言って福島はもうだめだ」と思いました。8月に夫の仕事が終了し2年ぶりに郡山に戻ってきました。残しておいた家自体は幸いにもほとんど被害はありませんでしたが、放射線のことを心配なので、庭や家の外壁などの除染をしました。今もなお海外の多くの友人から「大丈夫?」「心配しているよ」というメールをもらいます。人間って、戦争とかでいろいろ憎しみもあるけど、やっぱりやさしい。今こうして普通の暮らしを家族と一緒に元気にしている喜びを県外の人、海外の人に伝えたいです。

佐々木和彦さん (須賀川市 男性)

須賀川市は約8万人の人口を持ちますが、12月は、前年同月比で約2,000人の減となっています。やはり放射線の影響なのでしょうか?周りを見渡してみても、特に小学生以下の子どもを持つ家庭の移動が多いように感じられます。私はボランティアで外国人に日本語を教えています、教室に通っていたカザフスタンの親子が震災後東京に移住してしまいました。私はもう年も年なのであまり気にしていませんが、やはり小さな子どもを持つ家庭では、福島のものでできるだけ食べないようにしているようです。世界の人たちには、とにかく福島に来て、今の福島の実状を自分の目で確かめてほしいと思っています。

ロペス ケンさん (福島市 フィリピン籍男性)

私には、妻と1歳、5歳、7歳の子どもがいます。震災当時は、水もガスも止まり放射線への不安もあったので、16日には東京に避難し、その後フィリピンに避難しました。仕事のこともあるので子ども3人を実家に残して夫婦だけで5月に福島へ戻ってきました。今は、スカイプなどで子どもたちと連絡を取り合っていますが、会えなくてとてもさびしい。子どものビザのこともあるので3月には一度子どもたちを呼び寄せるつもりですが、放射線のことを心配です。外で遊ばせられるのか、食べ物はどうしたらいいのか、呼び寄せてもどのくらい居られるのか不安で仕方ありません。

徐京美さん (いわき市 アメリカ籍女性)

震災で家が全壊したので、しばらく一人息子と一緒に避難所や友人宅に身を寄せていました。夫は当時アメリカで仕事をしていたので、すぐに帰ってきてもらい家族全員が揃ったのは18日でした。すぐに一軒家の借家を探し、そこでの生活を始めましたが今でも慣れません。夫の新しい仕事は鹿児島で見つかったので、私たちもこの夏には鹿児島に引っ越し予定です。震災があつて既に10か月、毎日のように「復旧・復興」「放射線」「除染」と新聞やテレビで言われています。最初の頃は緊張感で他のことを考える余裕がなかったのですが、最近は正直言って疲れます。自分自身の心の「復旧・復興」が必要だと感じる今日この頃です。